吉川英治著「宮本武蔵(一)」吉川英治文庫 48、講談社、1975 年 6 月 1 日刊を読む

開倫塾
塾長　林明夫

ふり向いた眼はまたすぐ細工場のうちへ戻っている。武蔵は、見とれていた。しかし、そこで仕事をしている二人の陶器師は、顔も上げなかった。粘土(つち)の中にたましいが入っているように、三昧になりきっていた。

路傍にたたずんで見ているうちに、武蔵は、自分もその粘土(つち)を捏(こ)ねてみたくなった。彼には、何かそういう事の好きな性質が幼少(ちいさ)い時からあった。――茶碗くらい出来るような気がする。

だが、その一人のほうの六十ぢかい翁(おきな)が、箆(へら)と指のあたまで、今、一個の茶碗になりかけている粘土(つち)をいじっているのを見ると、武蔵は、自分の不遜な気持ちがたしなめられた。

(これは、たいへんな技(わざ)だ、あれまで行くには)

このごろの武蔵の心には、ままこういう感動を抱(いだ)くことがあった。人の技、人の芸、何につけ優れたものに持つ尊敬である。

(自分には、似た物もできない)

はっきりと今も思う。見れば、細工場の片隅には、戸板をおいてそれへ皿、瓶(かめ)、酒盃(さかずき)、水入のような雑器に、安い値をつけて、清水詣での往来の者に傍ら売っているのである。――これほどな安焼物を作るにも、これほどな良心と三昧とをもってしているのかと思うと、武蔵は自分の志す剣の道が、まだまだ遠いものの気がした。

――実は、ここ二十日あまり、吉岡拳法の門を始め、著名な道場を歩いてみた結果、案外な感じを抱き、同時に自分の実力が、自分で卑下しているほど拙(つたな)いものではないという誇りも大いに持っていた折なのである。

府城の地、将軍の旧府、あらゆる名将と強卒のあつまるところ、さだめし京都にこそは、兵法の達人上手がいるだろうと思って訪れて行って、その床(ゆか)に心から礼儀を施して帰るような道場が、一軒でもあったろうか。

武蔵は、勝っては、その度に、淋しい気もちを抱いて、そこらの兵法家の門を出た。

(俺が強いのか。先が弱いのか)

彼にはまだ、判然としない。もし今日まで歩いて来たような兵法家が、今の代表的な人々だとしたら、彼は、実社会というものを疑いたいと思った。

しかし――

うっかり、それで思い上がることは出来ないぞということを、彼は今、見せられていた。わずか二十文か百文の雑器を作る翁(おきな)にさえ、じっと見ていると、武蔵は、怖いような三昧境の芸味と技(わざ)を感じさせられる。――それで生活(くらし)を見れば食うや食わずの貧しい坂屋囲いではないか。社会がどうして甘いものであろうはずはない。

「……」

武蔵は、だまって、心の裡だけで、粘土(つち)まみれの翁に、頭を下げてそこの軒を離れた。坂を仰ぐと清水寺の崖道が見える――

P279 ～ 280

＜コメント＞

吉川英治の名作「宮本武蔵」全八巻の第一巻からの引用です。朝日新聞の連載小説として昭和 10 年に多くの読者を得た。一生に一度は是非読みすすめたい名著。是非、御一読を。

2024 年 12 月 17 日（火）